

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	種村 和史
主論文題名： 詩経解釋學の繼承と變容——北宋詩経學を中心に据えて——				
(内容の要旨)				
<p>孔子によって編集されたという伝承を持つ『詩経』は、周代から春秋時代にかけての各地の民謡・朝廷の儀式歌・宗廟の祭祀歌を集成した、三百篇あまりの詩篇からなる中国最古の詩集である。『詩経』はまた、古典中国においては儒教の經典の一つとされ、人間や国家の守るべき道德律を教える、すなわち人々を教化するために作られたものと位置付けられ、崇高な地位を保持し続けた。『詩経』は歴代の学者によって研究され続け、その成果がおびただしい注釈書としてまとめられたが、このように文学的性格と道德的性格との二面性を有していたことに起因して、その注釈書にも、様々な視点や動機からの考察が混在している。詩経注釈書を分析することによって、我々は、注釈者個人の文学観、思想、時代状況に対する認識を知ることができるだけでなく、それらを総合的に考察することによって、ある時代の共通の思潮、歴代の文学観や思想の変遷も辿ることができる。</p> <p>詩経解釈の歴史にはいくつかのピークがあるが、中でも、士大夫階級が政治、学術、文化の担い手の地位を確立した宋代における詩経解釈学（「詩経学」とも称される）は、とりわけ大きな存在意義を持っている。この時代には、長らく詩経解釈の絶対的權威とされ、人々の思考を支配してきた漢唐詩経学に対して、一流の学者達がこぞって疑義を唱え、新たな詩経観と解釈方法を提示し、後世の詩経学に大きな影響を与えることになった。本研究は、この時代の詩経解釈学の学問的特徴とその形成過程を明らかにし、それによって、従来の詩経学史の捉え方を超えた、歴代詩経学の流れの実相を明らかにすることを目的とする。</p> <p>本研究においては、従来の研究では十分に用いられていなかった、ミクロな視点からの考察と比較対照による考察という二つの研究方法に拘った。前者は、『詩経』の総論的な経説ではなく、個別の詩篇の個別の詩句・語句の解釈に関わる経説の分析に基づいて考察を行うという方法であり、後者は、複数の注釈を比較対照しつつ問題を考察するという方法である。すなわち、本研究では、個別的・具体的問題についての経説を、同じ学者の類似の問題に対する経説と比較し、また、同時代あるいは異なる時代の学者の経説と比較し、そこに見出される差異の意味を考え、その差異を生み出した要因を分析した。そして、このような細部についての考察を積み上げることによって、ある学者・ある時代の詩経観・解釈理念・方法論を再構成するという方法をとった。とくに、本研究の中心の対象である北宋詩経学の実相を探る上では、唐・孔穎達等が太宗皇帝の勅命によって編纂した『毛詩正義』と比較考察することがとりわけ重要であることに鑑み、両者の関係について徹底的な考察を行った。</p> <p>本研究は五部に分かれる。</p> <p>第 I 部「歴代詩経学の鳥瞰」</p> <p>筆者の歴代詩経学に関する基本的な視座と研究の方法を簡明に提示するために、詩経学における具体的な問題を取り上げて、歴代の詩経学者それぞれの解釈からどのような学問的立場の</p>				

相違が見えてくるかを示し、それを通して、詩経解釈学史研究において、いかなる事柄が説明すべき問題として浮かび上がってくるかを概説した。

第Ⅱ部「北宋詩経学の創始と展開」

宋代詩経学の中でも、いままさに新たな学問が構築されつつあった北宋時代をとりあげ、この時代の代表的な学者である、欧陽脩・王安石・蘇軾・程頤の論著に視点を据えて、そこに表れた解釈理念と方法を考察した。考察に際しては、個別の学者の研究のみを見るのではなく、それが同時代の他の学者とどのような関係を持っているか、また、それが前代の学問——漢唐詩経学——とどのように性格が異なるか、あるいはどのような継承関係を持つかを探った。さらに、彼らの残した学術的成果がその後の詩経学の発展にどのような貢献をしたかにも注目した。こうして得られた知見として、以下の項目が挙げられる。

① 『毛詩正義』の重要性

漢唐詩経学を構成する詩序・毛伝（伝秦～漢・毛亨撰）・鄭箋（後漢・鄭玄撰）・『毛詩正義』（唐・孔穎達等奉勅撰——以下、『正義』と略称）の中でも、北宋詩経学の形成に対して直接的かつ根本的な影響を与えたのが『正義』であることを明らかにした。特に、宋代詩経学の先駆けとなった欧陽脩『詩本義』が成立するために、『正義』が不可欠の役割を果たしていたことを論証した。欧陽脩以外の諸家においても多かれ少なかれ同様の現象が見られ、宋代詩経学の確立は『正義』なしにはあり得なかったことが確認された。

『正義』が宋代詩経学の確立に果たした貢献は、多岐にわたる。詩篇の比喻解釈・詩篇の構造・詩篇の意味の多層性についての認識・朱熹の「淫詩説」の源泉と考えられる認識などが挙げられる。さらに、追刺説（詩人が亡き君主の罪悪を詩によって暴き立て刺っていると捉える解釈）に対して宋代の詩経学者の多くは否定的見解を表明したが、彼らが反対の根拠とした認識も、その原形を『正義』に見出すことができる。このように、『詩経』の詩篇の修辞・構成・『詩経』の受容のあり方・メッセージ発信のメカニズム・道徳性の枠組みといった、新時代の学問としての北宋詩経学を特徴付ける、極めて多岐にわたる重要な問題についての認識の種子を『正義』の中にすでに見出すことができる。

『正義』（あるいはその源泉となった六朝の義疏）の著者によって唱えられた詩経観・方法論的認識を、宋代詩経学が継承したということは、とりもなおさず、漢代までの序・伝・箋に対して、唐代の『正義』と宋代詩経学とが共通の問題意識を抱いていたことを表す。これは、一般的な詩経学史の枠組みにおいて、『正義』を小序・毛伝・鄭箋と「漢唐詩経学」として一体視し、宋代詩経学と対立させる見方に修正を迫るものである。『正義』は従来、漢唐詩経学の最終形態であり、学問の形骸化を示す著述として重視されてこなかったが、実は多くの先進的性格を持ち、後代の詩経学のために発展の種子を残していたのであり、詩経学史の発展にとって不可欠の役割を果たしていた。北宋詩経学の諸家は『正義』を熟読玩味することによって、詩経解釈に関する根源的な問題についての考察を開始したとすることができる。

② 古注釈の素材化

宋代の詩経学者が前代の詩経学の成果を用いる際に採っていた戦略的態度も明らかにすることができた。彼らは、古注において本来経説と経説とを強固に結合していた連環（論理的連環あるいは学術史的連環）を外し、それぞれをばらばらの部品に還元した。その上で、ばらばらにされた経説を、注釈者自身の解釈にとって有用か否かという基準に従って選択し、それを部品として自由に組み合わせ、ある場合にはもとの注釈とは正反対の文脈の中に組み入れるこ

とによって、新たな解釈に取り込んでいった。このようにして、伝統的学説の権威を借りることによって、自己の解釈に新規性と同時に穏当性をも賦与することができたのである。

③ 宋代詩經学の学者間での影響関係

北宋詩經学の学者の中でも、王安石と程頤・蘇轍のように、異質と考えられている学者がいる。しかし、その解釈理念や方法に着目して分析したところ、彼らの詩經解釈の間にも親近性が見出され、従来異質とされてきたのは、主として政治的立場のような詩經解釈の外部に存在する要因から類推したにすぎない可能性が高く、このような観点から宋代詩經学史は再考される必要があることも明らかになった。

第Ⅱ部における学者本位の考察を通して、北宋詩經学に共通の学問的理念、問題意識、方法的認識が明らかになった。それを承けて、第Ⅲ部・第Ⅳ部は、より包括的な視点から、宋代詩經学に共通する学問的特徴がどのような要因によって形成されたかを探った。

第Ⅲ部「解釈のレトリック」

宋代詩經学の学問的特徴のうち、その文学的側面に関する認識についての考察を行った。詩篇からどのようにして意味を抽出するかという問題も考察の対象となった。考察を通じて以下のことが明らかになった。

① 詩篇の内容は実際に起こったことである

宋代詩經学の注釈書を見ると、詩篇に詠われている出来事は現実に関係したことであり、そこに登場する人物も歴史上に存在した人々であるという考え方を、解釈の基板にしていることがわかる。このような認識は、前代の詩經学から変わるものなかつたものであり、宋代のみに止まらず、漢唐——宋元明——清を通じて詩經学の歴史を通じて根強く存在し続けた。

従来、漢唐の詩經学は歴史主義的な解釈を行ったが、宋代詩經学はそのような解釈態度から脱却したとしばしば言われるが、これは再考の余地がある。たしかに、漢唐詩經学にとりわけ顕著に見られる、詩篇を歴史的に著名な事件に結びつけ、詩句の一つ一つについてその対応関係を探る解釈は、宋代の学者によって牽強附会と批判された。しかし、「歴史主義的解釈」の概念を拡大し、著名であるか否かを問わず歴史上に実在した人物や実際に起こった出来事が詩篇に詠われているという前提で行われる解釈と捉えた場合、このような態度は宋代の詩經注釈でも変わることがなかつた。つまり、宋代を含む歴代の詩經学者は、このような「歴史主義的解釈」を前提とした上で、それぞれの解釈学的挑戦を展開したのである。

② 詩篇の構造に対する関心、「作者」に対する関心

漢唐詩經学の詩經解釈では一篇の詩のうちのある章・ある詩句・ある語の意味を考える時に、他の章・他の詩句・他の語との関係を考慮せず孤立的に解釈する傾向が強かつたのに対して、北宋の諸家は、一篇の詩を有機的な統合体として捉え、部分を必ず全体の内において考えようとし、詩篇の筋の整序化を目指した解釈を行った。このことを、詩篇の構造の把握の仕方をよく表す三種類の術語、「汎論」「汎言」（詩篇の一部を、一般論とか一般的な教訓を詠ったものと捉える解釈の仕方）・「仮設」「設言」（詩篇の一部分を、出来事をそのままなぞったものではなく作者が仮構したものと捉える解釈の仕方）・「思古傷今」「陳古刺今」（いにしへの理想の世の中を思いあがれて、それとの対比で今の世の乱れたありさまを嘆き悲しみ批判する、という枠組みで詩の内容を捉える解釈の仕方、そのうち王安石の解釈に見られる、思古

詩を時間的に構造化されたものと捉える見方が注目される)を分析することによって明らかにした。

このように詩篇を構造化されたものと捉える解釈のあり方は、詩篇を構成した作者の存在を強く意識したものである。言い換えれば、宋代の詩経学者は、解釈を通じて作詩の現場を追体験しようとしたのであり、そこに宋代詩経学の解釈学としての新しさを見ることができる。

③ 意味の多層性と詩の道徳的メッセージの発信者についての認識

宋代詩経学の諸家は、詩篇が多層の意味（あるいは詩篇が発するメッセージ）を持っていることに注目し、多層の意味（あるいはメッセージ）の生み出し手たち相互の関係について関心を寄せた。その嚆矢は欧陽脩の「本末論」で、そこでは、詩篇は詩人の作詩の意図（詩人の意）のみならず、それを収集整理した朝廷や諸国の官僚の意識（太師の職）、『詩経』を編纂した孔子の配慮（聖人の志）、およびそれを研究した歴代の儒者の解釈（経師の業）という、位相の異なる複数の意味を含んでいるという学説が展開され、後の詩経学に大きな影響を与えた。

欧陽脩の視点は、詩篇の意味層を、一層の内在的意味（作者によって本来的に表現されあるいは暗示された意味。詩人の意）と多層の外在的意味（作者以外の者によって見出され後付けされた意味。太師の職・聖人の志・経師の業）に分割するもので、後の学者達も基本的にこの認識を踏襲した。しかし、歴代の詩経注釈において、詩の作者が詩中の語り手に対して、あるいは詩中の語り手が詩の主人公に対して第三者的な立場に立って、詩中の出来事、主人公の思いに、ある種批評的な態度で臨んでいるという認識が見られる。本研究ではこれに注目し、従来の認識を発展させ、内在的意味を多層的に捉え、かつ内在的意味と外在的意味とを連続的に捉える視点を導入することにより、詩経学の歴史の中で、意味の多層性に対する認識がどのように変化したか、その要因は何かを考察することができた。

考察の結果、二つの要因を見出した。第一に、詩篇の登場人物は歴史的に実在し、詠われた内容は歴史上実際に起こったものであるという認識が詩経解釈学史を通じて支配的であったため、詩中の出来事の当事者が詩篇の作者たり得るか、そうでないとしたら、作者は出来事に対してどのような立場で臨んでいるかが解明すべき問題となった。

第二に、『詩経』が儒教の経典であり人類を道徳的に教化する存在であったことにより、詩篇から読者に対して発せられた道徳的なメッセージが、誰によりどのように発せられたのかが問題となった。このことから、詩経解釈学では、詩篇の意味構造の分析という文学上の問題が、詩経の持つ道徳的性格と密接に関係していることがわかる。

④ 詩序に対する態度

また、これに付随して、漢唐詩経学の解釈の根本的よりどころであった詩序についての、宋代の各学者の評価の歴史的な位置付けを考察する上で、従来とは異なる視点を獲得することができた。宋代詩経学の諸家の間には、詩序を詩篇の真の意味を教えるものとして尊重するか（尊序）、恣意的で無根拠の放言として排斥するか（反序・廢序）という学的立場の違いが存在していた。従来は両者を相対立する態度として分類し、後者を漢唐詩経学から脱しきれない遅れた態度と評価することが多かった。しかし、尊序の立場に立った方が、詩篇に込められた詩人の本来の意図・純粋な感情の読み取りと、儒学の経典として『詩経』が人々に発している道徳的メッセージの解明とを、両立させて解釈を行うことが容易になる。その点から考えると、尊序という立場は、必ずしも注釈者が守旧的な儒学的思考に囚われていたことによるのではなく、むしろ儒学者としての立場は保持しつつ、詩人の心に迫ろうという宋代詩経学の方向性を実現するた

めの、選択的態度であったとも言えるのである。また、尊序と反序は対立する態度とは必ずしも言えず、むしろ反序の立場に立って自由な解釈を行おうとしてぶつかった限界を乗り越えるために、その学問の後継者があえて尊序の立場に立つという現象もあった。

第Ⅳ部「儒教倫理と解釈」

『詩経』が儒教の經典であったことにより、その解釈は倫理・道徳的な認識に関わる要素を持つことになった。さらに注釈者は自らが生きる時代の歴史的状況と思潮の影響を受けざるを得ず、詩経解釈の中に、注釈者自身の時代に対するメッセージを込めることもあった。このような視点で分析したところ、宋代の詩経注釈では、詩経から読み取る道徳倫理が、前代に比べて厳格化していることが明らかになった。漢唐詩経学の解釈に比べて、詩中の主人公が自分の属する共同体に対してより強い帰属意識を持ち、それを見捨てて新天地を求めることをタブーとする傾向がある。あるいは、詩篇を追刺詩（すでに世を去った主君の悪事を暴露し批判する内容の詩）として解釈することを忌避する傾向もある。これらは、宋代における儒教倫理の教化が、詩経解釈に反映されたことを表す。

ただ、このような儒教倫理の強化の傾向それ自体だけを見ると、保守的なもの、思考の固定化を表すものに見えるが、実はこのような解釈自体が、文学的問題と同様、宋代詩経学の新しい解釈認識や方法論によって導出される形で展開されている。あるいは、それが、新しい解釈認識や方法論を生み出す基盤になっていることさえある。したがって、詩経の文学的関心からの解釈と道徳的関心からの解釈とは、互いに歩調を合わせる形で宋代詩経学の構築に貢献したと考えるべきである。

第Ⅴ部「宋代詩経学の清朝詩経学に対する影響」

本研究は、これまであまり深く検討がなされていなかった漢唐詩経学と宋代詩経学との有機的関係に考察の重点を置いたが、宋代詩経学が清朝考証学の詩経学に対してどのような影響を与えたかということもこれまで十分な研究が行われていなかった問題である。本章では、この問題を扱った。考察の対象として取り上げたのは、清朝考証学の詩経学における集大成的な著述であると評価される『詩毛氏伝疏』である。著者陳奂は、漢学独尊を高らかに標榜した学者であり、この書はそのような研究姿勢で貫かれているとされ、したがって宋代の詩経学からの影響関係はほぼないと考えられ、これまで両者の関係についてはほとんど考察されることがなかった。しかし、考察の結果、『詩毛氏伝疏』の中には、欧陽脩『詩本義』の学術的影響が濃厚に見出せることが明らかになった。陳奂が欧陽脩から継承したと考えられるものは、字義の解釈に止まらず、詩篇の構造についての認識という、『詩経』解釈の本質に係わる事柄に及んでいる。

陳奂は、毛伝の墨守をその詩経学の根本に据えたにも関わらず、なぜ欧陽脩の詩経学の影響が見出せるのであろうか。毛伝は基本的に詩篇の字句についての訓詁であるため、個々の訓詁を集積したとしてもその総和として詩篇全体の言わんとする内容が求められるわけではない。したがって、毛伝に依拠して詩篇全体の意味を知るためには、個々の訓詁を綴り合わせるための論理が別に必要となり、その際に陳奂は、欧陽脩『詩本義』の詩篇解釈の論理を援用したのである。

以上五部の考察を通して、詩経学の流れは、新たなイメージで捉えられるべきであることが明らかになった。通常、歴代詩経学史は、漢唐詩経学・宋代詩経学・清朝考証学の詩経学をそれぞれピークとする三つの山からなり、それぞれの山は前代の詩経学の理念・方法論を批判し、それに対抗すべく新たな理念・方法論を標榜することによって、自らの学問を構築したと捉えられる。それはまた、当事者たる各時代の学者の自覚的な認識でもある。しかしながら、本研究で行った、『正義』と宋代詩経学との関係、宋代詩経学と清朝詩経学との関係から考えると、三つの山それぞれの関係はそれほど単純な図式では捉えられないことがわかる。

それぞれの時代の詩経学が前代の詩経学に対する批判を大きな原動力として発展したのは確かであるが、批判のうちにも、前代の詩経学から詩経観や解釈方法といった面で、根本的なものを継承して自分たちの詩経学を形成していったのである。ただし、その継承は直線的なものではなく、受け継いだものを自分たちの学問的志向に合致するように、大きく変容させつつ利用した。その意味で、詩経学史を見る上では、各時代同士の批判・断絶の相ばかりではなく、継承・変容の相に注目しなければならない。そして、そのような継承・変容の相で詩経学史を見る時、『正義』から大きな要素を継承しながら、それを独自の理念に基づいて変容させ、再構築してあたらしい詩経学を作り上げていった、宋代詩経学、特にその形成期である北宋の学者達が、詩経学史上に果たした役割の大きさがいっそう理解できる。

宋代詩経学に通底する学的志向は、詩篇の構造の解明と論理性の追求とを融合させたものと概括できる。この特徴は筆者が取り上げた宋代詩経学者のいずれにも見出すことができた。そのような研究姿勢はしばしばその解釈に、過剰解釈の傾向をもたらした。しかし、そのような負の側面はあるにせよ、この態度が宋代詩経学を確立させるに大きく力があつたことは認めなければならない。

